

郷土室だより

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地1-1-1

電話 3543-9025

刊行物登録番号 08-035

中央区の”橋“

(その4)

◇汐入り川

前号でとりあげた川流の変遷や、橋材の材質によって橋杭の寿命が大きく変わることを物語っていた「千住大橋来歴之事」の後半の部分を紹介します。

なぜならば、この史料は千住大橋だけでなく、両国橋、新大橋、永代橋に共通する事柄が多く含まれているからです。

まず原文では、

大橋杭へ水蟲船蟲ハ附つかないめは不申儀ハ、川下浅草川とハ違ひ、にが汐の差引薄、汐上之義ハ、都て山水故、水蟲船蟲等附不申候。

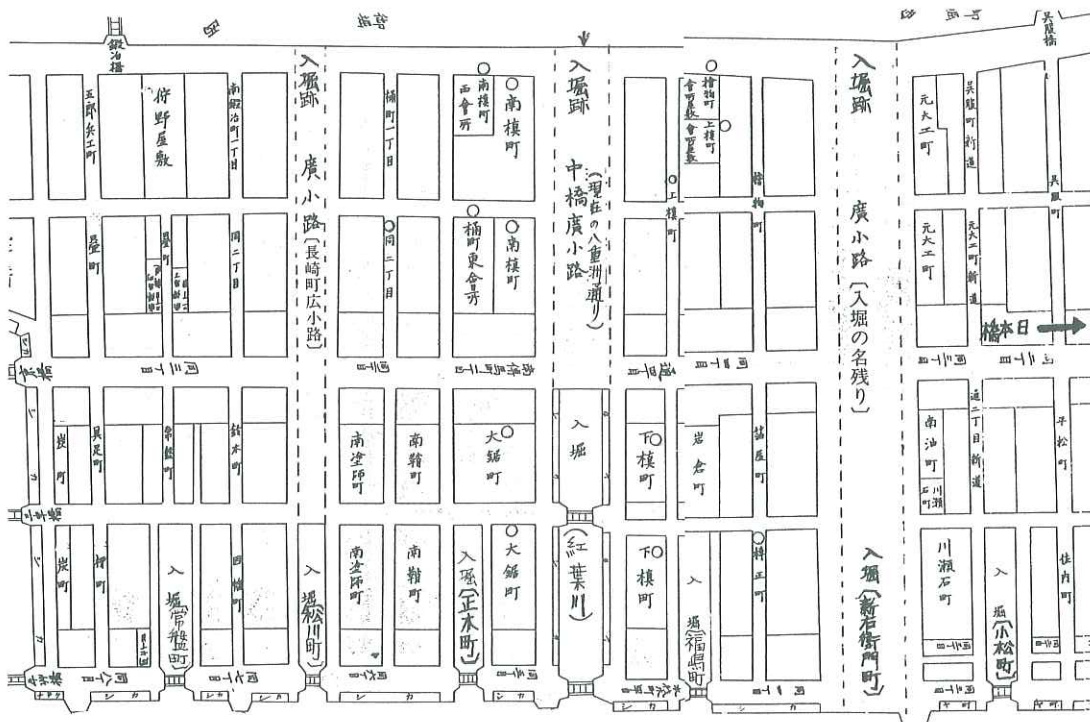
右之通古来之者方へ承合、吟味之上、書付差上申候。

享保八癸卯年十二月廿二日

小塚原町橋戸町

名主 寄主
年寄 百姓代

つまり千住大橋の橋杭に水虫や船蟲が棲みつかず、橋杭の腐食の原因になるような巢を造ったり卵を産みつけたりしないのは、



御府内沿革図書より作成

○印は本文参照

「川下の浅草川」とは違って、毎日二回の潮汐の干満のたびに「が汐」(海水まじりの水)の差し引きが少ないためである。

千住大橋辺はすべて「山水」(真水)のため、橋杭を腐らせるような害虫はすむことができない。

このようなことは昔からわれわれ地元者の観察結果を申し伝えたてきたもので、これを再検討した上で書きつけにしたものである。

とっています。

ここで考えられることは橋杭の材質が桧の場合は「汐」の干満の影響が楨より大きいために、楨材の半分しか寿命がないのか。

また、水虫や船虫は楨より桧を好む結果として「虫損」に差が出るのか、という二点について現代的な解釈がほしいような気がするのです。

しかし当時の人々が日常的に観察し続けた記憶を何十年も語り継いで確認していた事実を、まとめたこの記録はそれなりに正確であったといえましょう。

さらにつけ加えますと享保八年(一七二三)の時点でも、わずか

二キロたらず「下流」の地点にある「川下の浅草川」と、千住大橋の下を流れる「山水」ばかりの旧入間川(荒川は、はっきり区別されていることがわかります)。

◇両国橋掛直記録

正式には「両国橋掛直御修復書留」という記録があります。幕府が両国橋の修復について、広く関係者から意見や情報を集めた記録集です(この記録はたとえば『東京市史稿』の「橋梁篇」などには多く利用されています)。

その中で幕府の直営の道路や橋工事の技術者のことを道役と呼んでいました。

寛保二年(一七四二)当時の道役の一人だった善兵衛に、多分幕府が両国橋の楨材の木質について諮問をしたのでしょう。

ところが善兵衛は直接その事については回答せず、つぎのように答えた文書が残っています。

問 両国橋の橋杭を千住大橋と同じく「新木楨丸太」にした場合、本当に「川虫」も付かず水流で

「木細」にならないのか。

答 前にも述べた様に、千住大橋は真水ばかりだから虫がつかない。虫がつくようになったのは、この五十年以来のことで、「江戸御繁昌に随い、諸廻船絶えず湊に」来ることにより「畢竟(江戸の川虫は)廻船に付いてきたものと考えられる。

とっています。

この道役善兵衛の父親は前に見た貞享五年(一六八八)に流失した多摩川河口の六郷川の、流れ残った楨材と金物一切で当時は日本橋浜町の対岸に当る「小名木川西河口」に万年橋(これも始めは「本番所の橋」と呼ばれた)を掛けた技術者でした。

この先代善兵衛によると、六郷橋は「虫付き」を防ぐために「楨一式」で掛けたのだが、「六郷川ハ砂川ニテ杭之根堀レ、保チ申サズ」、つまり楨材を支持する地盤が柔かいため、洪水に耐えられなかったことが、橋を廃止したこと

の技術的条件だったことを明らかにしています。

六郷橋を復興させず、船渡しで通した理由を、江戸城防備のためだとする見方が一般的ですが、真相は案外、多摩川河口の沖積砂層の厚さが大きかったことであつたようです。

◇楨か楨か

六郷橋の廃材利用で掛けられた万年橋は、その約二十一年後の宝永六年(一七〇九)には、「(楨の)杭悉ク虫喰、木細ク危成候」という状態になったため、当代の善兵衛が命じられて掛け直しました。

その時に幕府から支給された楨材は「楨一式」であつたといっています。

そして楨材と虫喰いの関係について、

両国橋杭を「新木楨」にしても虫喰を防げるとはいえないこと。例証として「六郷川ニ遣イ候古杭ニテさへ」虫喰があつたこと。

新しい木で渋気のある材の場合、いよいよもって虫喰いがないとはいえない。

これまでのように「楨丸太」の

新木（新材のこと）を「杉削り」にして□不明□ニ而水際より下を塗るようにすれば、虫喰いは防げるかと考えられる。

といっています。

要するに新材の橋杭の表面をすべすべに仕上げた上で、適当な塗料を塗れば虫喰いは防げるというものです。

◇本材木町船入堀の埋め立て

ここで橋杭のことからいったんはなれて、当時の建設資材の中心であった木材と日本橋・京橋の関係をみることにします。

元禄三年（一六九〇）、つまり徳川家康が江戸に入城してから百年目の年に、江戸前島の東岸の本材木町一〜八丁目の各町から、内陸部に掘られた一〇本の船入堀のうち、七本が埋めてられてそこに新しい町が成立しました。

その時の新町名は北側から音羽町、小松町、新右衛門町、福嶋町、紅葉川をへだてて正木町、松川町、常盤町の七カ町でした。

前後してしまいましたが、この

船入堀とは慶長十七年（一六一一）六月に、江戸城の総仕上げのな天下普請のために、必要資材の陸揚げ施設として掘られたものです。場所は現在の首都高速道路の江戸橋ジャンクションから京橋ランプの間で、当時の海岸線だった場所です。

注 船入堀のくわしいことはこの『郷土室だより』の71号の中央区の海岸線（その四）と、『中央区沿革図集』（日本橋篇）をごらん下さい。

この海岸線から中央通りを経て外濠（現在の東京駅一帯）までの十本の船入堀という名の運河の役割は、築城用の巨木や巨石が海上輸送されてきたのを、江戸湊の水路に引き込んで、船から直接陸上に荷揚げするための工夫でした。

今ですと船着き場は海に突き出した埠頭（棧橋）を使って荷揚げしますが、当時は棧橋を造る技術が十分ではなく、また遠浅の海岸だったため、発想を転換させて陸地に船を引き込むことで、棧橋の役割と同じ効果を得たものが江戸の船入堀だったのです。

◇榎づくし

元禄三年の埋立ては、この十本の船入堀のうち、中心の紅葉川船入堀（中橋広小路）、現在の八重洲通りと、京橋川（現在の高速自動車道）だけは残しました。

このうち紅葉川船入堀付近を、当時から昭和初期までの地図で見ると、「榎」や「松」のつく町名やそれに関係する町名が多いことに気づきます。

もちろん時代によって相当な変化はありましたが、紅葉川（現八重洲通り）の北側には上榎町・下榎町、さらにその北側に松物町と箔屋町を越えて樽正町があります。紅葉川の南側には南榎町・大鋸町・桶町などがありました。

近世の初期には都市の町は同業者の集団で形成されていて、町名もその集団の職能や取扱ひ品目にちなんだものでした。したがって紅葉川（中橋広小路）の一角は、海岸線（現在の高速道路）ぞいの材木町一〜八丁目と並んで、大きな木材産業の基地だったのです。

なお材木町八丁目の南には製材業の町の木挽町一〜八丁目、こ

れも海岸線に沿って続いていたこともつけ加えておきましょう。

◇榎の意味

これまでに橋杭の材質について「松・楓・松葉」や「榎」といった樹名が出てきましたが、ここで改めて整理をしてみますと、橋杭の「虫喰」「木細」を防ぐ場合と、川水に汐がまじる場合はどの用材を使えば良いのかという点に、関心が集中していたようです。

橋杭とほぼ同じ条件のものに舟があります。『和漢船用集』二の「舟用木之事」には、
（前略）河舟は真水ゆへ朽やすし、故に真榎を上品とす。楠、栢、草榎是に次、松、杉又是に次げり（中略）
海舟は潮故朽ることなし、楠、楓、太布、梅、樅を用、（後略）

この辺がいわば古来からの常識だったのでしょうが、さきの道役善兵衛の主張する江戸湊の水虫・舟虫は諸国から運ばれて繁殖したという説もあるわけで、用材の選

定はこの点も考慮しなければならなかったようです。

木材の樹種を植物学的にはなく、「ことば」の問題として見ると、マキとは真木・榎・榎と書き純粋な木の意味に使われました。

より具体的には、①スギの古名②イヌマキ、ラカンマキ、コウヤマキのこと。③建築材料の最上の木という意味で、多くはヒノキの美称だ、などと国語事典にあります。

ヒノキの場合は「日本特産」、建築材料として最上。

榎葉^{あすなろ}||ヒバ あすなろの別称、翌^{あすなろ}榎||明日はヒノキになろう。

建築材、舟材、枕木など。

榎^{つぎ}||ケヤキの別名、漢和字典には「とねりこ」||榎という説もあります。

榎の漢字としての意味は①こずゑ、②木がたふれる状況。日本字としての意味では、一位科の常緑喬木雌雄異株、いぬまき、羅漢松。『和漢三才図会』では「木部、香木類、信州木曾山中多有之、其材色白密理、最耐水、作槽桶等」とあります。

熟語としての榎皮^{まきはだ}は榎の内皮を

砕いたもの(後略)、これが玉川上水・神田上水などの「水道管」の継手のパッキングに多用されていることや、いまでも木造船や桧風呂や大桶の水もれ防止用のパッキングに使われています。

◇榎町

こうしたことをふまえて、結論的にいえば、マキは真木で最上の建築材としての意味で使われたと考えられます。江戸城の普請に使われる用材は最上のものが指定されたことは当然のことです。ですからこの場合、榎という樹種ではなくマキ||真木であって、ま

がっでも薪ではなかったのです。榎物町の榎物はヒノキを薄く、いで「わけもの」||「まげもの」にしたもので、真木でなければできない品物です。今も木曾路の名産として知られています。

榎^{まき}正町^{まき}の榎も榎物の材料と同じような薄板です。これも榎目がよく通った真木でなければへぐこ

とができません。榎物に使う板よりも少し厚味のある板というところでしょう。へぐは剥ぐ・折ぐと

も書き、うすくはがすとか、むくという意味です。

南榎町に続く大鋸町は真木を縦引きの鋸で製材する業者、または縦引きの鋸を商った町といえましょう。縦引き鋸とは材木の梢から根本の方に、つまり長手に引き割るもので、切断面は榎目になります(鋸の歯が荒く板挽用)。

対する横引き鋸は樹木を輪切りにする鋸で、切断面には樹木の年輪が現れます。

桶町の桶も真木でなければ作れません。榎目の通ったサワラが最適だとされますが、耐水性のまった榎も桶の重要な材料です。

中国では榎といえば棺と舟の材料とされています。日本の榎との違いは調べていませんが、ともに耐水性が大きいという点で、共通的な利用がされていたようです。

水路はるばる運ばれてきた真木を、大鋸で挽いて大別し、さらにそれをへいで比較的厚い材を桶町に、薄い板づくりは榎正町にまかせ、さらに薄く、いだ板は榎物町の加工にまわすという、真木利用の一貫作業が現在の八重洲通りを中心にくりひろげられていたので

◇現在の「榎町」

これまでに述べてきた地名・町名、そして海岸線・船入堀などはすべて姿を消してしまいました。

ほとんどが大小のビルの建ちならぶ街になっていますが、わずかに原型をしのばせるものは江戸橋―弾正橋間の海岸線と、それに続く京橋川の跡の高速道路。

マキ町の中心だった八重洲通り(ここは旧日本橋区と京橋区の間)境いでもありました。それも中央区になって、五〇年目を迎えようとしています。は紅葉川でした。

それよりとくに指摘したいのは、高速道路に直角な街郭の形に、かつての船入堀の地所の形がかなり明瞭に残されていることです。

土一升、金?両の高地価でも、人々の権利関係は厳然として残されていることが鮮烈です。

鈴木理生